

商いの新しいものさし

（株）商い創造研究所
代表取締役

松本 大地

第22回

街と商いに品格をつくる大切さ

「人に品格があるように、街にも品格がある」と思われた、先のロンドン・オリンピックのマラソン・コース。何度も映った息を飲む美しい街路には、古い建物、川岸、石畳、橋、街路樹、ストリートファニチャー、サイン、フラワーポール、パサーシユカフェ、そしてレーザンホールマーケットとすべてがつながり合い、心と体が円熟した紳士淑女のようだった。

2008年より森記念財団では「世界の都市総合ランキング」を発表、「経済」「研究・開発」「文化・交流」「居住」「環境」「交通・アクセス」の6分野から、世界の主要36都市の総合力を

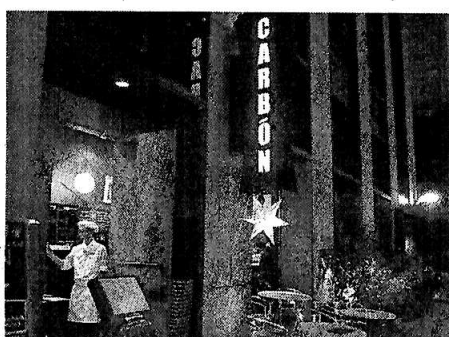
評価している。1位ニューヨーク、2位ロンドン、3位パリ、4位東京というトップ4都市の順位は4年連続で変わっていない。上位3都市は歴史と独特の生活文化の営みに魅了されるが、東京には人は集まるが生活文化力が劣るように感じる。それは大阪も同様であり、ロンドンの街のようにルールの中に独自の生活文化を育てていくことが求められよう。街は生き物、ならば街に品格をつくることは永遠のテーマとなる。

田充氏である。江戸時代は日本経済の中心的役割を果たし文化、芸術、暮らしが一体だった船場や淀屋橋界隈も、近年はビジネス街としての機能ばかりが目立ち、昼間仕事をすするだけの街になってしまった。

しかし、昨今はこの街区が昔ながらのものをリスペクトし、伝統と新しさが重なり合う街へとシフトを始めた。大人が街を楽しめるよう、気のきいたレストランやブティック、ギャラリー、ライフハウスといった文化の香りや、シティーホテルや住居が混在する街へと変貌中である。

その第1号となったのが、2003年に誕生したスペイン料理店「エルボニエンテ カルボン」。今やエリアのシンボルとなったこの店は、通りに面して入り口や窓、店舗から楽しい会話がかほれるような仕掛けがある。

そして08年、小学校跡地に開業した「淀屋橋オドナ」、複合型タワーマンション、シティーホテルと続いていく。合わせて、周辺の個性的なカフェやレストランが歴史的建築物と調和した新しい息吹をもたらす風景には、歴史は新しくつづいていくものと感得させられる。この界隈には国指定重要文化財や国登録有形文化財の建築だけではなく、商業建築としてレトロな渋味を出す建物が連なり、淀屋橋WESTは面として北船場とつながること、大きな街のアイデンティティを形成している。自発的な街づくりと、街を愛する自那文化の懐の深さや温かさは、街の再構築には欠かせない要素と



淀屋橋WESTのシンボル「エルボニエンテ カルボン」

思えた。暮らす街、仕事する街、遊ぶ街といった要素が複合された街は筋肉質の強靱な体質になる。かつて丸の内は仕事をすするだけの街であったが、丸の内に従事する24万人のワークスタイルを

せない要素と暮らす街、仕事する街、遊ぶ街といった要素が複合された街は筋肉質の強靱な体質になる。かつて丸の内は仕事をすするだけの街であったが、丸の内に従事する24万人のワークスタイルを

街と絡めてデザインすることで、アフターファイブも、土日休日も、外からの来訪者も交わる場所となった。今や丸の内は会社と家との間に、心地良く人とつながれる居場所としてのサードプレイスの役割を果たす。さらに大通りに面していない裏路地には、表情や性格が異なる表と裏のお店がミックスされ、そこから品格の幅が広がる。東京駅丸の内駅舎は保存・復原された。安易に建造物を建て替えず、古い街並みを大切に景観を守るのは、街への強い愛情や誇りがあるだけだ。東京駅に漂った品格が備わっていたからだろう。

人格は一朝一夕には変わらないが、品格は新しい何かを求めて大きく変わる事ができる。自分たちが生活する街、商う街、集う街のコアコンピタンスは何なのか？ 自らのものさしで確かめてみよう。